慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	ボストンマラソンテロ事件をめぐる顕彰行為： パブリック・メモリー, SNS, スポーツ・イベント
Sub Title	Commemorating the Boston marathon bombing : public memory, SNS, and sports events
Author	鈴木, 透(Suzuki, Toru)
Publisher	慶應義塾大学法学研究会
Publication year	2015
Jtitle	教養論叢 (Kyoyo-ronso). No.136 (2015. 2) ,p.65- 86
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	論説
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00062752-00000136-0065

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

ボストンマラソンテロ事件をめぐる顕彰行為
――パブリック・メモリー，SNS，スポーツ・イベント――

鈴　木　　透

1　はじめに

2013 年 4 月 15 日，ボストンマラソンのゴール近くに仕掛けられた爆弾が二か所で相次いで爆発し，三名の死者を含む多数の負傷者が出た。アメリカ有数のスポーツ・イベントでのこの無差別テロは，容疑者としてアメリカへの複雑な移住の背景を持つチェチェン系イスラム教徒が逮捕されたこともあって，2001 年 9 月 11 日の同時多発テロ事件以来続く「テロとの戦い」の日々に新たな緊張状態を作り出すものだった。しかし，同時に忘れてはならないのは，この特異な事件が現代アメリカにおけるパブリック・メモリーのあり方に新たな一石を投じる可能性である。

これまでにも筆者は，ベトナム戦没者追悼記念碑の建立（1982），エイズ・メモリアル・キルトの製作（1985～），カスター古戦場の名称変更とインディアン・メモリアルの建立（1991，2003），オクラホマシティ連邦ビル爆破事件と記念館の開館（1995，2001），スミソニアン航空宇宙博物館での原爆展の中止（1995），同時多発テロ事件（2001）など，現代アメリカのパブリック・メモリーの動向に大きな影響を与えた出来事に関する論考を発表してきた。そして，現代アメリカにおいて社会的弱者の存在や共同体の危機が記憶の民主化の新たな契機となり，それが公式の歴史が排除してきた埋もれた記憶や私的な記憶を公的領域に誘導してきたこと，さらには，それが故人にまつわるモノや声の収集という次元から IT 技術の普及と相まって第三者が公的記憶の形成に参加するという形態へと進化してきたこと，その一方で国境の外の記憶に対しては冷

淡であり続けるという「記憶のダブルスタンダード」を払拭できず，記憶の民主化が愛国主義に飲み込まれやすい状況が続いていること，等の現代アメリカのパブリック・メモリーの諸相を明らかにしてきた[1)]。

ボストンマラソンテロ事件も，「社会的弱者」と「共同体の危機」という，これまで記憶の民主化に大きな影響を与えてきた数々の事件との接点を備えている。実際，この事件は，社会の周縁に追いやられたマイノリティの犯行であり，ボストンの年中行事の中でも特別な意味を持つイベントが狙われた点で，地域共同体に与えたショックは計り知れないものがあった。加えてこの事件においては，従来の事件には見られなかった文脈も存在する。この事件は，本格的な SNS 時代に初めてアメリカが体験した大規模なテロ事件であると同時に，アメリカ史上恐らく初めてスポーツ・イベントに参加ないしそれを見物する一般市民を標的とした無差別テロだった。また，標的とされたものも，連邦や国家のシンボルというよりは一地域の地元意識に根ざしたイベントであり，人々の事件に対する受け止め方も，「アメリカが狙われた」というよりは「ボストンが狙われた」という感覚が支配的で，テロ事件が愛国主義に直結するような構図とはやや異なる次元を含んでいた。さらに，犯人が，在留資格やアメリカ国籍を取得した地域社会の一員としての顔と，移民として疎外されてきた顔や，世界各地でのイスラム原理主義運動との接点をも感じさせる存在であるという事実は，この事件を純粋にアメリカ国内の事件として語りつくすことの困難さを示唆しており，国境の外の記憶を排除しようとしてきた記憶の民主化の弱点を改めて問題化するような契機をも含んでいる。そこで小論では，この事件の持つ諸要素が現代アメリカにおける記憶の民主化の軌跡とどのように関係づけられるのかを明らかにしながら，事件後に自然発生的，ないしスポーツ・イベントを舞台として行われた顕彰行為の持つ意味を分析し，そこに記憶の民主化をめぐるどのような新たな潮流や課題が顔を覗かせているのか検討したい。

2　ボストンマラソンテロ事件の概要

1897 年に始まったボストンマラソンは，アメリカで最も権威あるマラソン大会の一つである。1896 年に最初の近代オリンピックが開催された時，アメリカ選手団の中核を担っていたボストン体育協会の関係者が，オリンピックでのマラソン競技に関心を抱き，その肝いりで翌年から始まったものである。記録や順位を狙う選手にとっては，参加標準記録が厳しいことから，この大会に出場することは今では世界中のマラソンランナーにとって一つの目標となっているが，同時にこの大会は別枠で一般の市民ランナーにも門戸を開き，今ではトップ選手から市民ランナーまで総勢 2 万 4 千人もの参加者を擁するビッグ・イベントとなっている。

コースは，ボストン西方のホプキントンから 9 つの街を経由して，ボストン中心部のコープリー・スクエアに至るもので，田園地帯から郊外の住宅地，都心の商業地域と様々な景観が楽しめるものとなっている。ゴール地点のコープリー・スクエアは，植民地時代の街の中心であったダウンタウンの歴史地区からは少し内陸側に入ったところで，ボストンの経済活動の中心的存在のいわば副都心のような区域にある。ゴール地点に隣接するボストン公共図書館は，誰もが無料で利用できる公共図書館としてはアメリカ最古のものであり，そこには，誰しもが参加のチャンスを与えられる可能性があるというこのマラソンのコンセプトと共鳴するものがある。ボストンを郊外から中心部へと横断し，この街の精神を再確認するという，まさに空間と時間の両方からこの街を体感するようなコース設定なのである。

コース設定のみならず，このマラソンの開催日も，象徴的意味を持っている。例年このマラソン大会は，「愛国者の日」としてマサチューセッツ州では祝日となっている 4 月の第三月曜日に開催されてきた。愛国者の日とは，独立戦争の火ぶたが切られたボストン郊外のレキシントンとコンコードでの戦いが行われた日（1775 年 4 月 19 日）にちなんだものである。この日は，ボストンにとっては独立革命の震源地としての自分たちの原点を再確認する特別な日であり，それにふさわしい特別なイベントとしての地位がボストンマラソンには与

えられているのである。当日は，大リーグに所属するボストン・レッドソックスの試合がフェンウェイ球場で午前から始まるというしきたりもあり，午後の早い時間に試合が終了すると，観客たちは球場近くのケンモア近辺にくりだし，沿道からランナーたちを応援するのが慣わしとなっている。その時間には既にトップ選手たちはゴールしているので，ケンモア付近を通過しているランナーは一般市民ということになるが，この一日は，独立戦争を牽引した街としての誇りを改めてボストンの人々の心に呼び覚ますのみならず，地元の野球チームを応援し，市民ランナーも応援することで，ボストン市民が地域との一体感を強く感じる日となっているのである。

このように，ボストンマラソンは，単なるマラソン大会ではなく，ボストンという街のアイデンティティに関わる象徴的なイベントと言える。だが，地元の誰しもが重要な年中行事として認めているこのイベントが，無差別テロの標的となったのである [2)]。

2013 年 4 月 15 日（月曜日）の午後 2 時 50 分，ゴール近くの歩道に仕掛けられた爆発物が相次いで爆発し，ランナーと見物人の双方が巻き込まれた。逃げ惑う人々で現場は騒然となり，後続のランナーたちは 25.5 マイル地点（ゴールの約 1 キロ手前）で警察により制止された。この時点でゴールできていなかったランナーは，5700 人に達していた。爆発により三人が死亡，足を切断せざるを得なくなった人は 16 人に及んだ。

FBI はすぐさま監視カメラに映っていた画像の解析に乗り出したが，カメラの角度が悪く，犯人らしき人物の正面からの画像を得ることはできなかった。そのため，2001 年の同時多発テロ事件を連想した人々の間からは，またイスラム過激派の仕業ではないかとの憶測がネット上で流れ，現場付近にいたイスラム教徒らしき風貌の人たちに疑惑が向けられるという混乱も生じた。そこで当局は，三日後の木曜日夕方に二人の容疑者の画像を公開し，一般市民からの情報提供を募った。そして，木曜日の夜，ボストンからチャールズ川を渡った対岸のケンブリッジにあるマサチューセッツ工科大学で，パトロール中の警官ショーン・コリアが殺害される事件が起きた。犯人は逃走し，テロ事件との関係は不明だった。ところが，ほどなく運転中の男性がカージャックされるとい

う事件が発生した。犯人は運転していた男性を助手席に座らせて連れまわし，その男性のキャッシュカードを使うなどしたが，すきを見て逃げ出した男性に通報されてその車で再び逃走した。カージャックにあった男性は，犯人がテレビで公開されたテロ事件の容疑者と一致することと，マサチューセッツ工科大学で警官を殺害したとほのめかしていたことを警察に告げ，自分の車の GPS 機能を使って追跡するよう促した。

男性の車は，ほどなくボストン郊外のウォータータウンで発見され，容疑者と警察との銃撃戦となった。犯人の内一人は死亡したが，もう一人は近くに止めてあった別の車で逃走した。死亡したのは，チェチェン系移民のタメルラン・ツァーナエフで，逃走したのはその弟ジョハルと判明した。警察は，翌金曜日に付近を封鎖して一軒一軒探し回ったが，ジョハル容疑者は発見できず，捜索終了後に，住民から自分の庭においてあるボートの中に血を流した男性が潜んでいるとの通報を受け，ようやく金曜日の夜になってジョハルの身柄を確保できたのだった。

兄弟二人の容疑者がなぜこの犯行に及んだのか，その全貌はいまだに明らかになっていないが，外国生まれの二人の複雑な生い立ちとアメリカでの疎外が深く関係しているとみるのが妥当だろう。二人の父親は，キルギスタン出身のチェチェン人である。スターリンの時代，多くのチェチェン人がシベリアや中央アジアに追放されたが，二人の祖父もその一人だった。二人の父が結婚したのは，チェチェンとは以前から敵対関係にあるダゲスタンの女性で，チェチェン共和国が 1990 年にロシアからの一方的な独立を宣言すると，二人の両親はチェチェンに移り住んだが，ロシアが 1994 年に軍事介入するとキルギスタンに舞い戻った。しかし，そこでもロシア系住民から迫害されたため，2002 年に一家はアメリカに移住し，マサチューセッツ州，ケンブリッジに住みついた。

なぜ一家がアメリカを選んだのかは，判然としない。当時は同時多発テロ事件直後で，彼らのようなイスラム教徒に対する敵愾心がアメリカ社会では依然として強かった時期であるし，親戚が多数住んでいたわけでも，友人のつてをたどれるわけでもなかったようだからだ。恐らく，できるだけ遠くへ逃れたい

という願望や，ロシアによるチェチェン人の迫害という人道的理由を強調することでアメリカならば受け入れてくれる可能性があるという計算がはたらいた結果なのだろう。

このように二人の家系は複雑な民族対立に翻弄されてきたわけだが，新天地アメリカに兄弟は適応していたように見えた。兄のタメルランは父親譲りのボクシングが得意で，高校時代には全米レベルの腕前になり，将来はオリンピックも夢ではないと一家の期待を担う存在になっていた。弟のジョハルは高校のレスリング部でキャプテンとして活躍し，成績もよく，大学への奨学金を手にして，2011 年秋にはマサチューセッツ大学のダートマス校に進学することができた。同年彼は，アメリカ国籍を取得している。

しかし，順調に見えた一家の生活は，次第に狂い始めていた。タメルランは，コミュニティ・カレッジに進むも，長続きしなかった。2009 年，彼は，アマチュアボクシングの全国大会で決勝戦まで進んだが，ダウンを奪ったにもかかわらず判定負けを宣告され，翌年にはアメリカ国籍を持たない選手の参加を認めない旨，大会規定が変更されたことから出場機会を奪われてしまったのだった。意欲をなくした彼は，2010 年にアメリカ人女性と結婚したものの職にありつけず，家計は専ら妻が支え，自宅で育児にいそしむ毎日だったらしい。社会からの疎外感にさいなまれつつ，自宅に引きこもりがちだった彼は，次第にインターネットの世界にのめりこみ，アメリカへの敵意を煽るイスラム原理主義のサイトを閲覧し共鳴するようになっていったようだ。2012 年に彼はダゲスタンに旅行しており，イスラム原理主義勢力と何らかの接触を持った可能性がある。一方，兄よりも快活な人柄だった弟のジョハルは，周囲に溶け込んではいたものの，麻薬の売買に手を染め，将来への展望を次第に失っていったらしい。折しも，父親が健康を害したことをきっかけに両親が離婚し，父親がダゲスタンに帰ってしまったという経緯も彼らの苦悩に追い討ちをかけたのかもしれない。

しかしながら，この事件にイスラム原理主義が実際にどの程度深く関わっているのかについては，判然としない部分もある。二人の家庭は，確かにイスラム教徒ではあったが，父親は世俗主義者で，父親も兄弟もアメリカでは飲酒を

していたようだ。また，兄のタメルランが結婚する際，チェチェン人かイスラム教徒でなければ認められないということだったようだが，これも妻がイスラム教への改宗に同意したことで一件落着していたし，そもそもこの一家は定期的にモスクで礼拝する習慣さえ持っていなかった。タメルランが本格的にイスラム教に心酔するようになったのは，ボクシングへの夢を断たれた後の恐らく2010年から2011年にかけてだったと思われる。この時期に彼は，酒を絶つとともに，アメリカのイスラム世界への攻撃を非難する書き込みをフェイスブック上で繰り返すようになり，その内容の過激さからFBIによる追跡対象者になっていたとされる。ダゲスタンでの滞在を通じて現地のスンニ派の厳しい戒律に触れることで彼の態度はより強硬になっていったのだろうが，その彼が弟にどの程度の影響を与えたのか，また，弟自身が兄ほどにイスラムの信仰に帰依していたのかどうかは判然としない。

加えて，兄弟がなぜボストンマラソンを標的にしたのか，その必然性にも疑問が残る。現に，弟のジョハルは2012年に大学一年生の時，親しい友人と一緒にボストンマラソンを見物し，楽しいひと時を過ごしていたようだ。そもそも，スポーツ・イベントは，要人の暗殺や経済活動への打撃といった，アメリカへの報復に直接結びつく可能性は低く，まかり間違えば外国からの参加者が犠牲になる可能性さえある。アメリカ社会に適応できなかったことや，アメリカが海外で行っているイスラム勢力に対する攻撃への義憤が動機だとしても，テロの標的として地元のマラソン大会を選ぶという選択は，必ずしも合理的とは言えない。

むしろこのことから浮かび上がってくるのは，二人の犯行の持つ衝動的傾向であろう。アメリカでの将来の展望にもはや希望が持てなくなっていた二人は，恐らく兄のタメルランがダゲスタンから帰国した後の2012年の後半には何らかの形でアメリカ社会に復讐せずにはいられなくなっていたが，経済的に不安定でこの先どうなるかわからない状況の中で，とにかく最も直近の地元のビッグ・イベントを狙うしかないと判断したのだろう。ニューヨークなどのもっと人の集まるところへ出かける資金もなく，その日暮らしのような彼らにとっては，4月のこのイベントを逃したら後がないという焦りすらあったのかも

しれない。しかし，その分，彼らには犯行を綿密に計画する時間がなかった。その証拠に，監視カメラの画像が一般公開されるという展開を十分に計算していなかった形跡が認められる。彼らがマサチューセッツ工科大学で警官を殺害したのも，武器を入手するためだったと考えられるが，ロックを外すことができずに，銃の入手に失敗している。カージャックにしても，人質を取り逃がしてしまうという失態を演じている。逃走手段や武器や逃走資金の入手に関して，かなり無計画だったと考えざるをえない。

その見地からすれば，この事件を事前に予測し，犯行を未然に防ぐことは困難だったのではないかと思われる。タメルランに関しては，ロシア当局も以前から目をつけており，アメリカから出国することがあれば通報するようアメリカ政府に要請していたらしいが，2012 年に彼がダゲスタンに向けてアメリカを出国した際には，両政府の間の連絡がうまく行われず，結果として彼の動静を把握できなかったようだ。現実には彼よりももっと危険度が高いと考えられていた人物の追跡で当局は手一杯であり，組織とのつながりが不明瞭で単独行動の域を必ずしも出ていなかった彼をマークし続ける必要性は低いと判断されていたのだろう。しかし，仮にタメルランの行動を両政府が追跡できていたとしても，犯行までの準備期間が短く，かつ，半ば思いつきのような次元に左右される要素が大きかったことを考えると，このようないわば気まぐれなテロまでをも事前に把握することは至難の業と言わざるをえないだろう。

以上の経緯を総合すると，この事件の容疑者は，ボストンマラソンというイベントをいわば場当たり的に標的として選んだ可能性が高く，このイベントが持つ象徴性について必ずしも深く理解していたわけではないように思われる。しかし，ボストンの人々にとっては，これは共同体への重大な挑戦であり，共同体の真価が問われる瞬間にほかならなかった。自分たちが一世紀以上にわたって祝い続けてきた地元の一種のお祭りが台無しにされたことは，市民の団結力を刺激するに余りあるものであった。しかし，そうであったがゆえに，それは，しばしば共同体の危機が誘発してきた愛国主義という要素を背景に追いやるとともに，市民参加型のスポーツ・イベントというテロ事件の舞台の持つ特徴に符合する形で，パブリック・メモリーの新たな方向性を提示することにな

ったと見ることができる。そして，そこでは，SNS 時代の到来という新たな時代状況が，パブリック・メモリーの動向に大きな影響を与えうることもが示されることになるのである。

3　メモリアルの自然発生的登場と撤去

爆発の直後から，ゴール付近一帯は直ちに警察により封鎖された。しかし，現場に近づこうとする人々の波が消えたわけではなかった。コープリー・スクエアの東側のボイルストン通り沿いに警察が設置したフェンスには，直後から供え物が置かれるようになっていった。このような光景は，オクラホマシティ連邦ビル爆破事件の直後にも見られたものであった。しかし，ボストンマラソンテロ事件の場合に特徴的だったのは，そうした個人的な行為がほどなくまとまったメモリアルの姿を呈するようになったことと，そのような市民による自然発生的な顕彰行為の背後でインターネットや SNS が大きな役割を果たしていたという点である。事件の記憶をどのように公共の場に刻み込むかという点に関して，ボストンの事例では，従来とはやや異なる傾向が見られたといえる。

ボストンマラソンテロ事件の直後から，自然発生的にまとまったメモリアルが登場した背景には，いくつかの要因が考えられる。まず一つ目は，メモリアルの中心となるような構造物が提供されたことである。それは，イリノイ州，オーロラのグレッグ・ゼインズが製作した三つの十字架である。事件の三日後の 4 月 18 日に設置された，犠牲者三人のそれぞれの名を刻んだ三つの白い大きな十字架を中心に，メモリアルは膨らんでいったのである。

第二の要因は，メモリアルを構成することになる統一的な素材の存在である。オクラホマシティ連邦ビル爆破事件の場合，事件直後から現場には様々なものが供えられたが，それらの中身は，国旗からぬいぐるみ，野球帽からピンバッジに至るまで多岐にわたっており，いわば思い思いの品が持ち込まれた形であった。ボストンの場合も，同様の傾向がないわけではなかったが，オクラホマシティと決定的に違っていたのは，これがマラソン大会を舞台として起こ

ったがゆえに，それに参加した共通体験を持つ人々による，共通の表現行為が多く見られたことである。すなわち，ランナーたちが，数百足にも及ぶ自分たちの靴を供えて行ったのである。しかもそれらは，靴紐によって結びつけられて巨大な塊と化し，十字架と並ぶこのメモリアルの基本的構成物となった。これらの靴は，マラソン大会を標的としたテロ事件の犠牲者に対するメモリアルにふさわしい造形を方向づけるとともに，それに統一的な外観を与えることになったのである。

第三の要因は，自然発生的に登場したメモリアルが膨らんでいくための安定した場所の存在である。当初は，メモリアルは警察が設置したフェンス沿いの歩道や道路にできていたが，通行の妨げになることから，移動せざるをえなくなるのは必至だった。しかし，供え物を撤去しようとする警察に対し，多くの市民が人垣を作って抵抗した結果，できかけのメモリアルは，いったんボイルストン通りとバークレー通りの角のバンクオブアメリカの建物の前に移された後，最終的には事件現場近くのコープリー・スクエアの一角に落ち着いた。古くから市民に親しまれてきた広場の一角に移設されたことで，メモリアルはボストンの風景の一部としての地位を獲得することになった。こうした経緯は，911 の際のワールドトレードセンターの事例とは対照的である。現場周辺の被害が大きく，また，メモリアルを設置できるようなまとまったスペースに乏しかったニューヨークの場合，一か所にまとまったメモリアルが自然発生的に構築されるような状況にはなかった。ボストンの場合，物理的被害の範囲がかなり限定され，かつ，現場近くに街のシンボル的存在のオープン・スペースが存在したことが，メモリアルの成長を後押ししたといえる。

第四の要因は，自然発生的なメモリアルを自発的に管理する人物が登場した点である。ボストン郊外のブロックトン在住のケヴィン・ブラウンは，4 月 18 日にまだフェンス沿いにあったメモリアルを目にして以来，毎日通い詰め，コープリー・スクエアにメモリアルが移設されてからは，そこの事実上の管理人となり，人々が次から次へと持ち込むものをレイアウトする役割を果たしたのだった。多くの市民がブラウンに差し入れをし，彼自身も一日の大半をここで過ごすという毎日が続いた。また，彼は，第四の犠牲者というべき，マサチュ

ーセッツ工科大学で殺害された警官ショーン・コリアのための第四の十字架を製作し，メモリアルに加えたのだった。

第五の要因は，メモリアルのテーマ性を方向づけるようなスローガンの出現である。そして，それにはインターネットやSNSの存在が大きく関わっていた。事件直後から，インターネット上では，事件で足を切断せざるをえなくなった人々への義援金の呼びかけがなされた。片足を失ったジェフ・ボーマンへの義援金は，19日間で70万ドル以上がオンライン上で集められた。また，事件二日後の水曜日にそれぞれ片足をなくした新婚夫婦の存在が知れ渡るや，その二人への義援金を募るサイトでは一夜にして30万ドルを超える寄付が寄せられ，総額はその後の4か月間で80万ドル以上に達した。しかし，インターネットが果たしたのは，このような義援金集めにとどまらず，事件を受けてボストン市民がどのようなメッセージを発すべきかを明確にする役割であった。

その一つは，“Boston Strong”のキャンペーンの開始である。事件発生後わずか数時間の内にエマソンカレッジの二人の学生が，犠牲者への支援の一環としてTシャツをデザインした。青地に黄色い文字で“Boston Strong”と書かれたそのTシャツは，ネット上に紹介されるや瞬く間に注文が殺到し，1枚20ドルのTシャツは最終的には2週間で4万7千枚が販売された。この言葉自体は，癌を克服したサイクリストのランス・アームストロングが唱えた標語“Livestrong”をもじったものとされているが，テロに屈しないというボストン市民の意志をシンプルかつ明確に表していたがゆえに，広く人々に受け入れられたのだった。このTシャツを着用することで，人々は自分の立場を表現し，共同体の一員としての感覚を再確認することができた。実際，ボストンでは，市長から大リーグの選手に至るまでが，このTシャツを愛用し，このスローガンの入ったマグカップやマグネットなどの関連商品も次々に登場した。このキャンペーンは，70万ドルもの義援金を集める大成功に終わったが，同時に見落とせないのは，この標語がメモリアルに与えた影響である。当初からメモリアルには，様々な事柄を書き込んだメッセージが持ち込まれてはいたが，次第にメモリアルには，この言葉やこの言葉を冠した品々が置かれるようになり，こうしてメモリアルが放つメッセージの一つが明確になっていったのだった。

“Boston Strong”以外に，その後このメモリアルに多く持ち込まれるようになったスローガンとしては，“No More Hurting People. Peace”がある。そして，このスローガンの広まりにも，インターネットや SNS が大きな役割を果たしていた。三人の犠牲者の一人が，8 歳のマーティン・リチャードだと判明した直後から，オンライン上では，“No More Hurting People. Peace”と書かれた紙を持つ彼の写真が飛び交うようになった。この写真は，彼が 2012 年に小学校二年生のクラスで非暴力と社会改革について勉強した際に撮影されたもので，この言葉は，彼の声を社会に届け，このような子供を二度と犠牲者にすまいという意思表示として，その後の多くの供え物に刻まれるようになっていったのである。

こうして“Boston Strong”や“No More Hurting People. Peace”といった，インターネットや SNS を介して瞬く間に人々の間に広がったスローガンが，様々な供え物を媒介としてメモリアルに集積された結果，このメモリアルが発しているメッセージの輪郭が整えられたといえるだろう。個人によるバラバラのメッセージの寄せ集めではなく，ボストンはテロには屈しない，暴力は認めないという統一的なメッセージが文字化されたことで，このメモリアルの持つ，構築物としてのテーマ性はいっそう明確になったとみることができるのである。

自然発生的，かつ短い期間にこのメモリアルが出現したにもかかわらず，それがメモリアルとしての統一感を獲得していった背景には，以上のような複数の要因が関係していると考えられる。オクラホマシティやニューヨークの場合と異なり，ボストンの場合，まとまったメモリアルが形成されやすい条件に恵まれていたといえる。しかしながら，恒久的なメモリアルと異なり，これを構成していたのは，靴やポスターや十字架など，布や紙や木といった，風雨にさらされると傷みが激しいものが中心だった。コープリー・スクエアの一角という場所を確保できたとはいえ，メモリアルをこのままの形で屋外で保存していくのは極めて困難だった。すでに 4 月下旬にボストン市長のトマス・M・メニーノは，ボストン市のアーカイヴス対して，メモリアルの供え物を保全するよう要請していた。5 月 7 日に大雨が降った際には，紙製のほとんどのものは事

前に市の保管所に移された。その後市長は，犠牲者や遺族と話し合いを重ねた結果，メモリアルを撤去する方針を固め，6 月 25 日に解体作業が行われた。その後，供え物の数々は，民間のいくつかの会社の協力の下，倉庫に保管されている。その一部は，事件から一周年を機に約一か月間ボストン公共図書館に展示された[3)]。

かくしてボストンマラソンテロ事件直後に出現したメモリアルは，現在では解体され，それを構成していた品々は保管されてはいるものの，メモリアルとしての姿はもはや写真でしか見ることができない存在となっている。恒久的なメモリアルが設置されるのか，また，仮にそれが作られた場合にオリジナルのメモリアルが復元されるのかどうかはいまだに不透明である。こうした状況は，一時的なメモリアルはボストンの場合ほど統一的なものが作られなかったにもかかわらず，すぐさま共同体全体が恒久的なメモリアルの構築へと動いたオクラホマシティとは対照的である。しかし，ボストンの事例は，インターネットや SNS 時代の到来によって，統一的なテーマ性を備えたメモリアルが市民の手によって自然発生的に登場しやすくなっているという，パブリック・メモリーをめぐる新たな状況を如実に物語っているといえる。と同時にボストンの事例は，スポーツ・イベントが事件の舞台となった事実と符合するかのように，恒久的なメモリアルに代わってスポーツ・イベントが顕彰行為の舞台として浮上していく流れをも作り出しているのである。

4　参加する記憶から立ち会う記憶へ――スポーツ・イベントにおける過去と身体の直結

コープリー・スクエアのメモリアルが撤去されたことは，事件の記憶を伝える象徴的構築物が失われたことを意味する。しかし，このことは，ボストン市民がこの事件を忘れてしまったことを意味するものではない。事件をめぐる記憶は，メモリアルとは別の形でその後繰り返し呼び起こされるようになる。メモリアルという構造物に代わって，パブリック・メモリーのチャンネルとなった存在こそ，実はスポーツ・イベントであった。そもそもの事件の舞台がマラ

ソン大会であったことを考えれば，スポーツ愛好者の一員という立場から，他の競技の関係者が何らかの形で顕彰行為を企画したとしても，そのこと自体は何ら不思議ではない。しかし，事件後のボストンで注目されるのは，アマチュア・スポーツたるマラソンとは本来無関係のプロスポーツが，共同体意識の形成や公的記憶の演出に積極的に関わろうとする様子が顕著に認められたことである。

例えば，プロアイスホッケーの NHL に所属するボストン・ブルーインズは，事件の 6 日後の日曜日に行われたホームゲームの終了後に，事件で負傷者の救出や治療にあたった警官や消防士，医療関係者など 26 名をリンクに招き入れ，その功績を称えるセレモニーを行った。また，大リーグに所属するボストン・レッドソックスは，事件で左足を切断する手術を受けたヘザー・アボットが退院した 5 月 11 日のホームゲームで，ロードアイランド州の自宅へ帰る途中のヘザーを招待し，彼女は大観衆の前で始球式を行った。この 5 月 11 日というタイミングは，大雨によって既にメモリアルの供え物が部分的に撤去されていた時期だった。その後，プレーオフに進出したレッドソックスは，10 月 13 日にホームで行われたアメリカン・リーグの優勝決定シリーズの第二戦に，ジェーン・リチャードを招待した。彼女は，事件で死亡した当時 8 歳のマーティン・リチャードの妹で，事件で足を切断せざるを得なくなった犠牲者としては最年少だった。彼女は，試合前の国歌斉唱の際に子供たちの聖歌隊とともにグラウンド上で国歌を斉唱した。結果的にレッドソックスはワールドシリーズまで進出しそれを制覇することになるのだが，レッドソックスの快進撃とテロ事件の悲劇をボストンが乗り越えることとは，いつしか表裏一体となり，ただならぬ興奮をこの街にもたらしたのだった。

フランチャイズ・システムを採るアメリカのプロスポーツでは，地元のプロチームは地域の文化的公共財としての性格を持っている。それゆえ，ホームゲームは，しばしば地域の一体感を演出する場ともなっている。テレビ中継を見ているだけではわかりにくいのだが，実際に試合に足を運んでみると，ちょうどテレビ中継ではコマーシャルの時間になっているような場面，例えば野球のイニングの変わり目とか，フットボールの各クォーターの終了時などには，地

域で活躍している人をグラウンド上に招待し，巨大なスクリーンで一人ずつ紹介して，オーディオ・ヴィジュアルなプレゼンテーションの中，大観衆が拍手とともにその功績を称えるといったことがごく普通に行われている。典型的なのは，警察官や消防士，軍人など，地域の安全を守る人々や，教育や社会福祉に貢献しているボランティアや財団関係者などが紹介されるケースであるが，通常ではスポットライトを浴びるような可能性が少ない，普段から地道に地域を支えている人々に対して晴れの舞台を提供し，感謝を捧げようというコンセプトが強いといえる。

その見地からすれば，ブルーインズやレッドソックスが行ったセレモニーは，普段からプロチームのホームゲームで行われているこの種のセレモニーと同種のものであり，特別新しいものでない。しかし，ここで注目されるのは，メモリアルが解体され，恒久的なメモリアルが白紙の状態にある中，スポーツ・イベントが事件の記憶を公共の場に招き入れる舞台としての役割を果たしてきているという点である。スポーツ・イベントの持つこうした機能は，同時多発テロ事件後のニューヨークでも見られたものではあるが，こうした傾向がさらにここで明瞭になったといえるだろう。

このことは，現代アメリカにおけるパブリック・メモリーの動向と照らし合わせてみると，ある興味深い観点を示唆している。現代アメリカのパブリック・メモリーは，「収集する記憶」から「参加する記憶」へというべき軌跡をたどってきた。当初は，無名の個人の生きた証を風化させないために故人にまつわる私的記憶を公共空間にコレクションするというコンセプトが強かったが，次第にそれは一般市民が自らの記憶を提供することでパブリック・メモリーの構築に参画するという様相を強めてきた。こした傾向は，同時多発テロ事件後に，様々な人々の記憶をアーカイヴ化するという動きに端的に表れていたが，インターネットをはじめとするハイテク技術は，収集から参加へと記憶の民主化の次元を推し進めたといえる。

しかし，これらのスポーツ・イベントにおけるセレモニーの中心をなしているのは，当事者との遭遇という体験である。もはやそこでは，人物にまつわるモノや記憶を収集するとか，多くの人々が記憶を持ち寄ってストーリーを編み

出すことが重視されているのではない。むしろ，そこで重視されているのは，過去を背負った当事者との時間を共有することによって，事件と自分自身とを直結し，事件の記憶を改めて可視化し体感するという，いわば「立ち会う記憶」というべき傾向である。

これと比べると，コープリー・スクエアに出現したメモリアルは，市民によって自然発生的にテーマ性を持ったメモリアルが短期間に作られたという点では確かにパブリック・メモリーの新たな一頁を記すものといえるが，そのコンセプトの基本は，やはり事件を目の当たりにした人々がパブリック・メモリーの構築に「参加する」という次元にあったといえるだろう。このメモリアルには，犠牲者にまつわる遺品が収集されているわけではない。ランナーたちが自分たちの靴を置いていったのも，多くの一般市民が様々な媒介物を用いてメッセージを書き込んだのも，この事件の記憶の一部に参画し，犠牲者への追悼の気持ちを公的な場で表現するためであった。しかし，そうした「参加する記憶」を基本コンセプトとするメモリアルが結果的に解体され，その後はほとんど日の目を見ることなく倉庫に眠っている一方で，スポーツ・イベントの中で「立ち会う記憶」の演出が繰り返されてきているという現実は，「参加する記憶」から「立ち会う記憶」へのシフトが起こりつつあることを象徴的に物語っているように思えるのである。

この種の「立ち会う記憶」の核心には，事件と自分の存在を何らかの機会を通じて直接結びつけようとする発想が見られるといえよう。そして，その舞台として誰もが集うことのできるスポーツ・イベントが活用されているわけだが，実際，こうした傾向は，オクラホマシティ連邦ビル爆破事件の後，2001 年からオクラホマ・シティ・メモリアル・マラソンという行事が新たにスタートしている点とも符合する。オクラホマシティでは，事件の記憶を風化させないために，事件が起こった 4 月に毎年市民マラソン大会を開催するようになった。参加者たちは，事件の記憶を改めて呼び起こしつつ，現場周辺を数時間かけて走ることで，過去の事件と自らの存在とを結びつける。現在アメリカでは，この大会は一生の内に走るべき 12 のマラソン大会の一つといわれるまでのイベントになっている。このように記憶の民主化は，モノやメッセージを通

して個人が公的記憶の構築に参加するという次元にもはや留まるのではなく，記憶を風化させないために当事者や現場と一人一人の身体とを直結させようとする傾向を新たに見せ始めているのであり，記憶を体感するためのオープンな場としてスポーツ・イベントが浮上していると考えることができるのである。

また，ボストンの事例は，インターネットやSNSがパブリック・メモリーに与える影響にも微妙な変化が訪れていることを示唆しているように思える。2001年の同時多発テロ事件の場合，インターネット上の投稿は，参加する記憶というべき次元を確かに切り開いたが，ボストンの場合，ツイッターでの発信は盛んに行われたものの，911の場合のように当事者以外の人々の記憶までをアーカイヴ化する動きはあまり見られない。仮にSNS時代の重要な感覚が「他者とつながっている安心感」へとシフトしてきているとすれば，昨今では「参加すること」自体というよりは「つながりが確認できること」の方がより重要な意味を持つようになってきているとも考えられる。スポーツ・イベントを舞台としたセレモニーは，そうした社会と個人のつながりを体感させる装置であり，恒久的なメモリアルよりもこの種の儀式が先行するような状況は，参加から絆へというSNS時代の到来に伴う微妙な感覚のシフトによって後押しされていると見ることもできるのである。

とはいえ，このような新たな潮流が，パブリック・メモリーが抱える課題を克服する特効薬となるのかどうかは予断を許さない。確かに，プロスポーツのホームゲームは，地元の一体感を演出する格好のイベントであり，「立ち会う記憶」の舞台としてはうってつけかもしれない。しかし，プロスポーツのホームゲームは，観客が一体となって部外者たる敵に勝利するための装置であり，敵と味方という二項対立の上に築かれた場である。そこでは，味方の一体感や，地域の悲劇からの再生を演出することはできる。だが，そもそも敵と味方を強烈に意識することは，ややもすると，敵を加害者，味方を犠牲者という枠に一方的に押し込めるだけでなく，自己の絶対化は「敵」の領域たる自分たちの外の世界を理解しようとする回路を遮断してしまいかねない。つまり，ホームゲームという場は，記憶の民主化の弱点というべき「記憶のダブルスタンダード」を克服する場としては本来向いていないのである。自分たちの外側の記

憶を招き入れ，なぜこのような事件が起こったのかに思いをはせるためのチャンネルは，こうしたホームゲームでのセレモニーだけからでは生まれにくいだろう。

現に，この種のセレモニーが危機に立ち向かう共同体の絆や悲劇を克服しつつある人々を称えることに集中してしまうことの代償として，この事件では，犯人たちマイノリティの立場を記憶表現に取り込もうとするようなベクトルはほとんど登場してきていない。このことは，現代アメリカにおける記憶の民主化の引き金となってきた一つの要因がマイノリティの記憶の復権であったことを考えると，非常に皮肉である。ホームゲームのように敵と味方の二項対立を過度に意識してしまうと，自分たちのコミュニティの内部に存在していたはずのマイノリティさえもが，あたかも共同体の敵たる部外者であるかのように位置づけられてしまい，自分たちの共同体が抱える闇の部分が隠蔽されてしまいかねない。事件の記憶を風化させないためにも，その作業の一環として，なぜチェチェン系の二人の若者がこのような行動に駆り立てられたのか，アメリカは彼らの目にどう映っていたのかといった観点を浮上させるような別の装置が必要なのである。

ホームゲームがパブリック・メモリーの重要な表現機会としての役割を担っていくことのもう一つの懸念は，当初のメモリアルが持っていたある種の国際性や越境性をそぎ落としてしまう可能性である。コープリー・スクエアに出現したメモリアルに供え物をした人の中には，マラソンに参加した外国人やアメリカ各地からの人々がかなり含まれている。実際，外国人によるメッセージや，外国にまつわるもの，アメリカの他の地域に関係した文物も，メモリアルには散見される。現に，メモリアルの中心となる十字架を提供したのも，ボストン市民ではなかった。その意味ではこのメモリアルは，参加する記憶という次元が主とはいえ，国境横断的・地域横断的な記憶の共有を体現している部分があった[4)]。しかし，「立ち会う記憶」を優先するあまり，この事件を地元の一体感と過度に結びつけてしまうことは，当初のメモリアルの持つこうした要素を風化させかねない。確かに，この事件の場合，強烈な地元意識が喚起されたことで，共同体の危機が愛国主義に直結してしまうようなリスクは回避され

たといえるが，その反面，共同体の外，国境の外へと広がっていた記憶の回路までもが地元意識によってかき消されてしまう危険性が存在するのである。記憶の民主化が国境の外の記憶への接近を苦手としてきた経緯からすれば，偶然にも多くの外国人がこのマラソン大会に参加していた事実や，犯人自身の複雑な背景がこの事件にもたらした，国境の外へと広がった記憶の回路を，この事件のパブリック・メモリーの構築の過程で生かしていく工夫が求められているといえよう。だが，地元チームのホームゲームという舞台は，それを積極的に推し進めることができるのか疑問が残る。ある意味でそれは，愛国主義とは別の次元での内向き志向を助長しかねないからである。

もっとも，従来型のメモリアルを併用すれば問題が解決するのかというと，それほど単純ではない。例えば，1999 年に起こったコロラド州，デンバー郊外のコロンバイン高校での銃乱射事件では，13 人の犠牲者を追悼するメモリアルが高校の裏のクレメント公園に作られたが，個々の犠牲者の生きた証を伝え，事件を体験した学校関係者の声を後世に伝えるという機能は果たしているものの，犯人たちがどのような人物だったのかや事件の背景などは，メモリアル自体からは伝わってこない。メモリアルの場合，遺族の心情を考慮して，犠牲者への追悼というコンセプトが中心になりやすく，事件の全貌を記憶として伝えるには必ずしも十分な役割を果たせない場合もありうるのである。

ボストンの事例は，社会が記憶をどのように公共の場で共有していくかというパブリック・メモリーのあり方に少しずつ変化が忍び寄ってきている可能性を示唆している。本格的な SNS 時代の到来は，市民による自然発生的なメモリアルの出現を後押しする一方，建設に時間を要する恒久的なメモリアルへの関心をかえって後退させ，記憶を特定の公共の場に刻み付けることよりも，過去を身体と直結し，共同体の一体感を確認できるような劇場型の装置を記憶表現の媒体として利用しようとする発想を助長しているように思われる。確かに，従来のパブリック・メモリーの主要な媒体であった固定的なメモリアルを時間と費用をかけて建設することは，SNS 時代のスピード感やマルチ・メディアが作り出す臨場感を重視するような感覚にはなじみにくい部分もあろう。しかし，ハイテク技術やイベント型の記憶表現によって記憶の民主化の弱点を

完全に克服できるわけではなく，公共の場でどう記憶を共有するかという問題は，従来型のメモリアルの持つ限界をも視野に入れつつ，さらなる検討を必要としているのである。

5　おわりに

小論では，ボストンマラソンテロ事件直後に見られた顕彰行為の持つ意味を，現代アメリカにおける記憶の民主化の動向と照らし合わせながら考察してきた。ボストンの事例の分析からは，現代アメリカにおける記憶の民主化に少しずつ新たな兆候が登場している様子が読み取れる。それは，公的記憶の構築により多くの個人が参加することよりも，記憶を体感し過去と自身とを直接結びつけようとする発想の台頭であり，その機会をより多くの人に保証するためのオープンなチャンネルとしてスポーツ・イベントが浮上してきているという傾向である。このことは，絆を体感しようとする SNS 時代の感覚と符合するものであり，記憶の民主化の潮流は，本格的な SNS 時代の到来を反映する形で変化してきているといえる。

こうした傾向は，従来型のメモリアル以外にも，オープンな体験型の様々な装置が記憶表現の媒体となりうることを示している点では，パブリック・メモリーを構築していく手段の多様化を意味しており，記憶の民主化の可能性を広げる部分を持っているといえるだろう。しかし，ローカルなスポーツ・イベントの持つ「オープンさ」が，記憶のダブルスタンダードの弊害を克服できるかどうかは未知数である。幸いこの事件の顕彰行為においては，あからさまな移民排斥やイスラム教徒への弾圧は影を潜めているものの，事件の核心へと至るための共同体の外へと広がる記憶の回路はいまだに不十分なままである。加えて，体験型のイベントが記憶表現の場として先行することで，恒久的なメモリアルへの関心が後退していくようであれば，それが今後のパブリック・メモリーのあり方にどのような影響を与えるのかも依然として不透明である。

ただ，いずれにせよ，ボストンの事例は，記憶の民主化が今後どう果たされるべきなのかを図らずも問いかけることになったのは間違いない。この事例

は，公的記憶への参加とそれをどう体感するかという問題が 21 世紀のアメリカにおけるパブリック・メモリーのあり方をめぐる中心的課題となりつつあることを予感させるものであり，記憶の民主化の今後を占う重要なヒントを含む存在として記憶されるべきなのである。

注

1）筆者の下記の論考を参照されたい。鈴木透「生まれ変わる古戦場――カスター神話の解体と先住インディアンの記憶の復権」，「デモクラシー，暴力，イノセンス――テロの時代における記憶の民主化と愛国主義」近藤光雄他編『記憶を紡ぐアメリカ――分裂の危機を超えて』慶應義塾大学出版会，2005 年，p. 87−130，281−321。鈴木透「危機の記憶とフォークアートの変容――エイズ・メモリアル・キルトの文化史」『教養論叢』134 号（2013 年），p. 1−16。

2）ボストンマラソンテロ事件の経緯については，Scott Helman and Jenna Russell, *Long Mile Home: Boston Under Attack, the City's Courageous Recovery, and the Epic Hunt for Justice*（New York: Dutton, 2014）を参照した。『ボストングローブ』紙の記者の手による本書は，多くの関係者へのインタビューを基に書かれており，現時点ではこの事件に関する最も詳細な著作である。

3）ボストン公共図書館では“Dear Boston: Messages from the Marathon Memorial”と題して，2014 年 4 月 7 日から 5 月 11 日まで，解体されたメモリアルの一部が一般公開された。筆者は，事件直後のメモリアルを直接目にする機会はなかったが，2014 年 4 月下旬にこの展示に接する機会を得た。

4）この事件の記憶をボストン以外の人々が積極的に共有しようとしていた形跡を物語る一例として，カナダのヴァンクーヴァー在住のベレーン・キャンベルが呼びかけた旗の製作がある。このプロジェクトは，小さな生地を紐でつないでボストンに対する人々の支援の気持ちを表すという趣旨で作られたもので，最終的には全米はもとより世界各地から 1700 枚もの思い思いのデザインの旗がボストンに送られた。実物は，2013 年 5 月に一度ボストン美術館の中庭に飾られた後，撤去され，事件の 1 周年を機に 2014 年 4 月の 1 か月間のみ再びボストン美術館の中庭に展示された。このプロジェクトは，コープリー・スクエアのメモリアル同様に，草の根的な記念物の製作が地域横断的に試みられていたことを物語るとともに，エイズ・メモリアル・キルトのように，パッチワーク的に記憶を紡いでいこうとする発想が表れている点でも興味深い。キルトを記憶の織物として活用する発想が，市民のエンパワーメントと結びついている一方，常設的な展示方法に問題を抱えている点については，「危機の記憶とフォークアートの変容――エイズ・メモリアル・キルトの文

化史」の論考の中で既に筆者は指摘したが，これと同様の傾向はボストンマラソンテロ事件においても見られたといえる。こうしたキルト製作的な記憶の織物の発想と，小論で取り上げた，コープリー・スクエアでのメモリアル構築からスポーツ・イベントによる記憶表現へという流れとが，参加と体感というパブリック・メモリーが直面する課題の中で今後どう関わっていく可能性があるのかについては，別の機会に考察することとしたい。